

子育て支援の現状と課題 II

～神戸親和女子大学子育て支援センターの実践から～

Study of current situations and issues of Childrearing Support. II

～Through the practice of the Center for Childrearing Support center at Kobe-Shinwa women's university～

石 岡 由 紀*
森 本 玲 子**

はじめに

2009年夏に、長年続いた自民政権が崩壊し、民主党政権が産声をあげた。今までの旧政権に対し様々な疑問や不満を持ちながらも政権交代という選択になかなか踏み切れなかった日本国民が今回こそはと様々な思いをこめて、新しい政権に期待しようという民意の表れと言ってよいであろう。その中で注目をあびたのは、やはり「子ども手当」に関する問題であり、国民の子どもをとりまく環境問題の関心の高さがそこに表われているといえる。

また、2009年7月には国連の女性差別撤廃委員会から、日本では未だ女性差別が是正されていない、と勧告されたり、11月には OECD から、25歳から54歳の日本女性の就労率が OECD 諸国の中で下位にあることを指摘されている。前述のような日本における女性にかかわる問題や、子どもを持つ女性の問題として子ども手当の支給や待機児童解消など、現状として様々な課題が山積されている。女性が育児に対して必要な時間は、仕事をしていく上においても、最も重要な期間であるといえる。その現実をふまえ、経済的な援助が必要な世帯には経済的支援を、時間が必要な世帯には時間的支援をというような、一律的な対応ではなく、柔軟な対応ができる仕組みが求められるのではないだろうか。

さて、本学における子育て支援センターの活動も丸2年がすぎ、その活動も安定感を感じさせる内容になってきている。本センターの利用者には専業主婦だけではなく、育児休暇中の母親もいる。本センターのプログラム内容に関しては前稿において述べたとおりである。本稿は2年間における利用状況と利用者に対して行ったアンケート調査の結果を報告し、今後の子育て支援のあり方について検討するものである。

*発達教育学部 福祉臨床学科

**神戸親和女子大学大学院文学研究科教育学専攻

1. 子育て支援センター「すくすく」の利用状況

対象：①2008年1月～2009年12月までの利用者

内容：①利用者数②年齢別利用者数③子育て相談の件数④子育て相談の内容⑤スペシャルプログラムの利用者数⑥ボランティア学生数

結果：①利用者数は子ども6266人，その保護者5279人，計11545人であった。この2年間で最も利用者の多かった日の利用者数は66人であり，2年間を通した1日の平均利用親子数は11.5組であった。月別利用者の推移は図1に示す通りである。

②年齢別利用者で最も多かったのは1歳児でこの2年間を通して2841人であり，これは全体の利用者の45.3%であった。次に多かったのは2歳児でその利用者数は1569人（25.0%）であり，次いで1歳未満児の1040人であった。その一方で4歳以上の利用者数は173人で全体の2.8%であった（図2）。

③子育て相談件数は2年間を通じて373件であり，月平均で15.5件の相談があった。

④子育て相談の内容として2年間を通して最も多かったものはしつけや育児方法に関する166件であり，次に基本的生活習慣に関する99件，次いで発育・発達に関する51件であった（図3）。

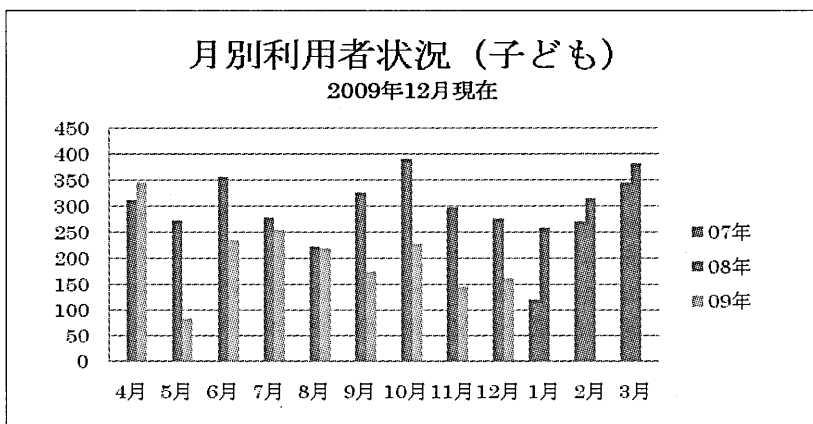
⑤スペシャルプログラムは2年間を通じて20プログラム実施した。その日程と内容は表1に示した通りである。

⑥学生ボランティアは2年間を通して1621人が参加していた。月別参加状況は図4に示した通りである。

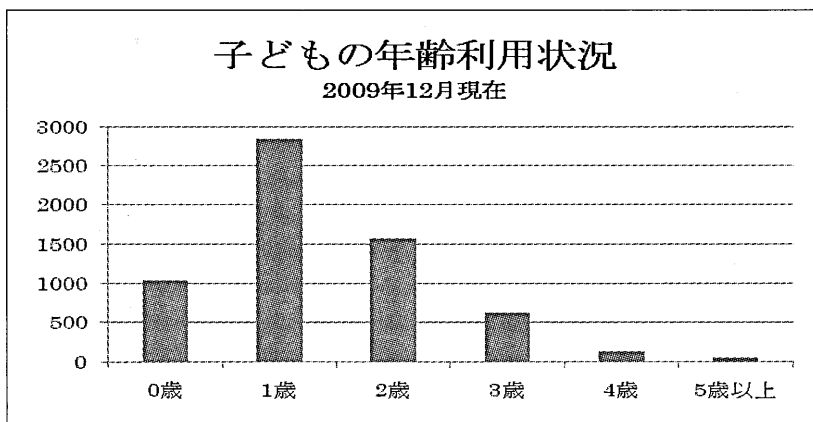
考察：本センター開設以来の利用者うちわけは子どもが6266人で，その保護者は5279人であった。2009年8月には本センター開設以来10000人となる利用者を迎えるなど，開設以来安定した運営が継続されていることがうかがわれる。ただ，2009年には，新型インフルエンザ感染拡大に伴い，本センターを閉館したことや，保護者による利用自

表1 スペシャルプログラム内容

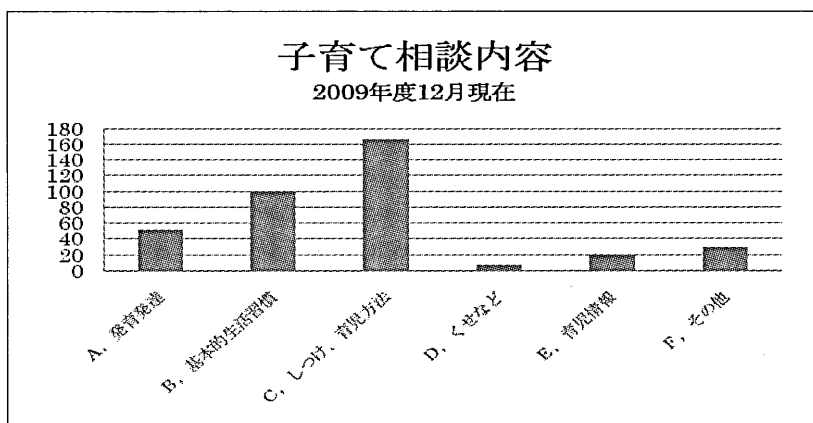
年	日にち	内 容
2008年	2月22日	保健師講習会
	4月18日	保健師講習会
	6月3日	わくわくクッキング
	7月25日	保健師講習会
	10月7日	わくわくクッキング
	10月24日	すくすく DE おいもほり
	11月22日	キッズオープンキャンパス2008
	12月1日	すくすくワーキング（クリスマスオーナメント作り）
	12月12日	保健師講習会
	12月12日	保健師講習会
2009年	2月3日	わくわくクッキング
	2月13日	保健師講習会
	3月3日	すくすくワーキング（Tシャツ作り）
	4月24日	保健師講習会



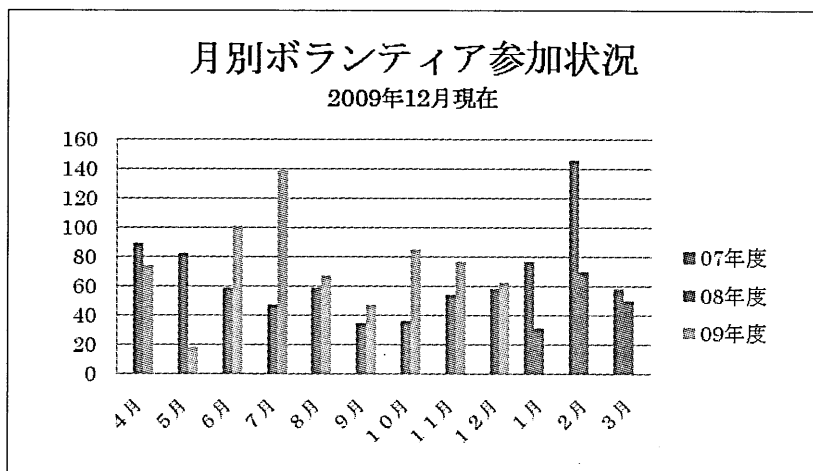
（図1）月別利用者の推移



（図2）年齢別利用者の推移



（図3）子育て相談内容



(図4) 月別ボランティア参加状況

粛などによる影響が考えられる利用者数の減少が見られる。新型インフルエンザ感染拡大は子育て世代に大きな影響を与えたことがうかがわれる。本センターを利用する理由についてはアンケート結果により明らかにする。

次に利用している子どもの年齢であるが、最も多いのは1歳児でその占める割合は45.3%で、2008年に比べると5%程度の減少がみられるが、2009年の2歳児の利用が25.0%であり、昨年の1歳児の利用者がそのまま継続して利用しているものと考えられる。3歳未満児の占有率は92.2%で昨年に比べると3%程度の上昇が見られ、本センター開設の本来の目的である未就園児を対象とした施設であることが、多くの方々に周知されてきていることがわかる。アンケート調査によると、もう少し年齢の高い子どもが遊べる大型遊具も設置してほしいというような要望もみられたが、本来の本センターの開設目的である未就園児とその保護者により快適に利用していただくためには、その年齢に応じた玩具や絵本等を準備する姿勢を持続することが大切であると考えられる。

また、この2年間の子育て相談の件数は373件で、昨年(190件)とほぼ同数であった。相談内容もその割合は昨年と同様であり、身近な相談者として本センターの保育アドバイザーに手軽に話をするというケースが多いものと考えられる。その内容も保育経験のある者であれば、それほど気にならないような内容(例えば「寝てばかりの子どもにどう接して良いかわからない(2か月女児)」「子どもをどのタイミングで叱って良いかわからない(1歳8か月男児)」など)のことが多い。本センターの特長の一つは専門家システムとの連携があることであるが、その専門家(臨床心理士等)への重篤な相談が今まで1件もないことからもうかがえる。しかし、育児経験の少ない母親にとってはこれらの問題は非常に気になる問題であり、それを一人で抱えること

になるとその内容の中身にかかわらず、それが非常に重篤な問題に発展することもあると考えられるのである。

この2年間に行われたスペシャルプログラムは全部で20プログラムであり、特に「わくわくクッキング」は子育て支援センター北との共催で、神戸市保育所主任調理師の方々にご協力をいただいている、まさに行政と大学が連携して行う子育て支援のあり方として象徴的なプログラムとなっている。さらに2009年からは新プログラムとして「すくすく DE パパと遊ぼう」「わくわくパパクッキング」というお父さん参加型プログラムを実施しているが、毎回多くの参加希望者の中から抽選をして参加をいただいているという状況にある。これは父親の子育てへの関心の高まりがうかがえる結果であるといえよう。

また、専門家との連携にならんで本学の子育て支援の特長の一つとなっているのは、学生ボランティアの参加数の高さである。2年間を通して1621人の学生が様々なプログラムに参加している。これも昨年の800人とほぼ同数の学生が参加していることがわかる。このことから、本センターでのボランティア活動が学生にとって恒常的に継続されているものとなりつつあることがわかる。

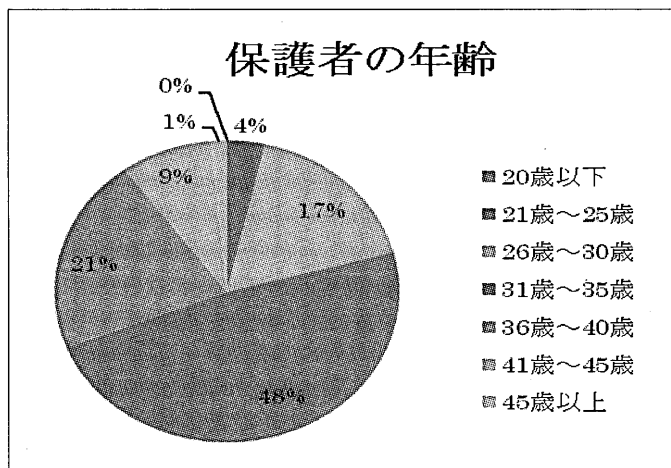
2. 本センター利用者によるアンケート調査

対象：2008年1月～2009年12月までの利用者417名

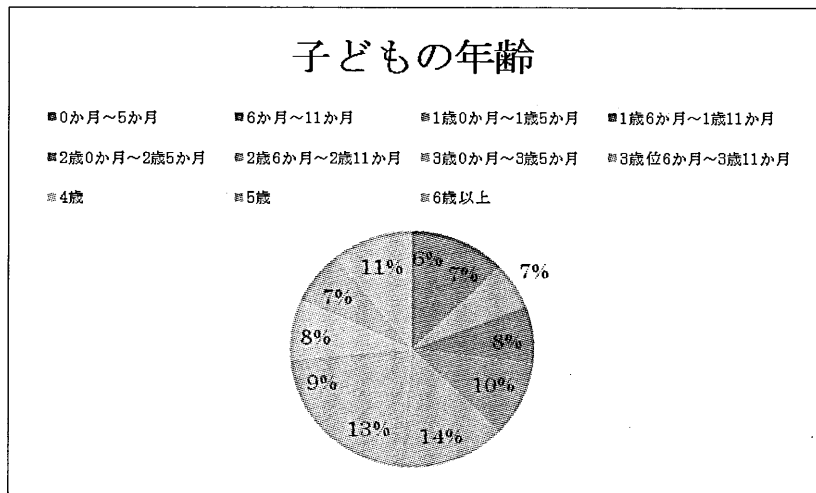
方法：郵送による質問紙法

期間：2009年12月からの1か月間

質問内容：①保護者の性別②保護者の年齢③子どもの数④子どもの年齢⑤利用頻度⑥情報源⑦利用する理由⑧参加したプログラム⑨希望するプログラム⑩改善点⑪その他



(図5) 保護者の年齢の推移



(図6) 子どもの年齢の推移

見 (⑨⑩⑪は自由記述)

結果：有効回答は139通であり、回収率は35.3%であった。

- ①アンケートに答えた保護者はほぼ全員が母親であった（2件祖母による回答）。
- ②保護者の年齢で最も多かったのは31歳～34歳（67人48%）であった。次に36歳～40歳（29人21%），次いで26歳～30歳（24人17%）であった（図5）。
- ③利用している保護者の子どもの数で最も多かったのは1人で（80人57%）であった。次に多かったのは2人で（51人37%）次いで3人（7人5%）であった。
- ④子どもの年齢で最も多かったのは2歳6ヵ月～2歳11ヵ月29人（14%）であった。次に3歳0ヵ月～3歳5ヵ月26人（13%）であった。次いで2歳0ヵ月～2歳5ヵ月21人（10%）であった（図6）。
- ⑤本センター利用頻度として最も多かったのは、月に1回（16%），次いで週1回か2回（11%），月に2回（7%）であった。
- ⑥本センターを知った情報源は知人であった。
- ⑦本センターを利用する理由として最も多かったのは子どもが安全に遊べる（29%），次に家から近い（21%）次いで他の子どもと遊ぶことができる（15%）であった。また最も利用する理由に重みのあるものは子どもが安全に遊べる，次に施設がきれい，次いで施設がきれいであった。
- ⑧本センタープログラムで最も多く利用されているものはデイリープログラムで，次にウィークリープログラム次いでスペシャルプログラムであった。
- ⑨今後あれば良いと思われるプログラムにはすすく DE おじいちゃんおばあちゃんと遊ぼうなどがあげられた。

⑩本センターで改善すべきものとして駐車場完備、トイレ出入り口に柵の設置などがあげられた。

考察： 「すすく」を利用してくださっているのは、圧倒的に母親が多いのであるが、「すすく DE パパとあそぼう」「わくわくパパクッキング」のように、日曜日に開催されるイベントには積極的に参加する父親の姿が見られる。このことから、育児に関心を示す父親は少なくないことが示唆された。育児に関心を持ちながらも、日頃の職務の都合上、母親と同じペースで子どもにかかわることができにくいため、育児に対する苦手意識を持っている父親のためにも、このようなイベントに参加することで、その苦手意識が少しでも払拭されればと期待を寄せるところである。

本センターを利用している保護者の年齢で、最も多かったのは、30代の女性でその割合は70%近くを占めている。その保護者の持つ子どもの数などを鑑みると、いわゆる一人っ子が57%を占めており、決して第一子出生の年齢が低いとはいいいがたい状況がうかがえる。これは現代における晩婚化または出産年齢の高齢化をうかがい知るデータであると思われる。

次に、本センターを利用する理由として複数回答された中で最も数が多かったのは「子どもが安全に遊べる」「家が近い」があげられ、その重み付けとしても、同じく「子どもが安全に遊べる」という項目が示されている。現代の社会問題の一つである社会的安全性が本センターでは高く評価されているものと考えられる。また、次に本センターを利用する理由として「施設がきれい」という項目があげられた。現代の30代女性の選択理由の一つに、清潔、きれいがあげられたことは、日常の彼女たちの服装や子どもの用品からもうかがい知ることができる。

さらに、本センターに対する要望として、駐車場の設置が求められた。ベビーカーを押して本学までの坂を登るのは、決して楽なことではないのは確かである。気候の良い時期ならともかく、夏場や冬場はそこご苦労も大きなことであると考えられる。また、このことは現状における車社会の影響を大きく反映している要望であると考えられる。その是非も含め、今後の課題として、検討を重ねていかなければならない問題であるといえよう。

おわりに

本学における子育て支援事業は、本稿報告における「すすく」の他、ダウン症子育て支援講座、自閉症児個別プログラム事業など、特別な支援を必要とする子どもたちへの支援にまでおよんでいる。それぞれのプログラムにおいて、私たちが常に念頭に置いていることの最重要ポイントは子どもたち一人一人の発達や特性を考慮してプログラミングし、援助することである。その他の配慮事項として保護者のニーズを把握し、その信頼を得ること、さらに、本人な

らびに保護者と同様にその兄弟姉妹への支援を行うことである。子どもが幼いほど、また特別な支援を必要とする子どもほどこれらの観点が重要であると考えている。

子どもたちにとって、最適な環境を提供するという姿勢が重要であるということはいうまでもない条件ではあるが、その他上記した2条件が考慮されない場合、利用を控えられてしまうことも考えられる。子どもたちに対してより良い環境を提供しようと考えても、利用していただければ、意味を持たないものになってしまうのである。

その点においては、本学の子育て支援センター「すくすく」の事業は利用者数または利用者アンケートの結果を通してある程度の実績が認められるものであると考えられる。

今後も、利用者のニーズを的確に把握し、より快適な環境で子どもたちの発達を支援するプログラムを実践していきたい。またそのみならず、本学の子育て支援事業の目的の一つとして、その保護者や家族を視野に入れ、各家族のライフサイクルに応じた子育て支援事業を展開していく所存である。